

明治實業讀本 卷四

教科書文庫  
4  
810  
44-1909  
2000054290

43337

教科書文庫

4  
810  
44-1909  
20000  
54290

Kodak Gray Scale

C  
Y  
M

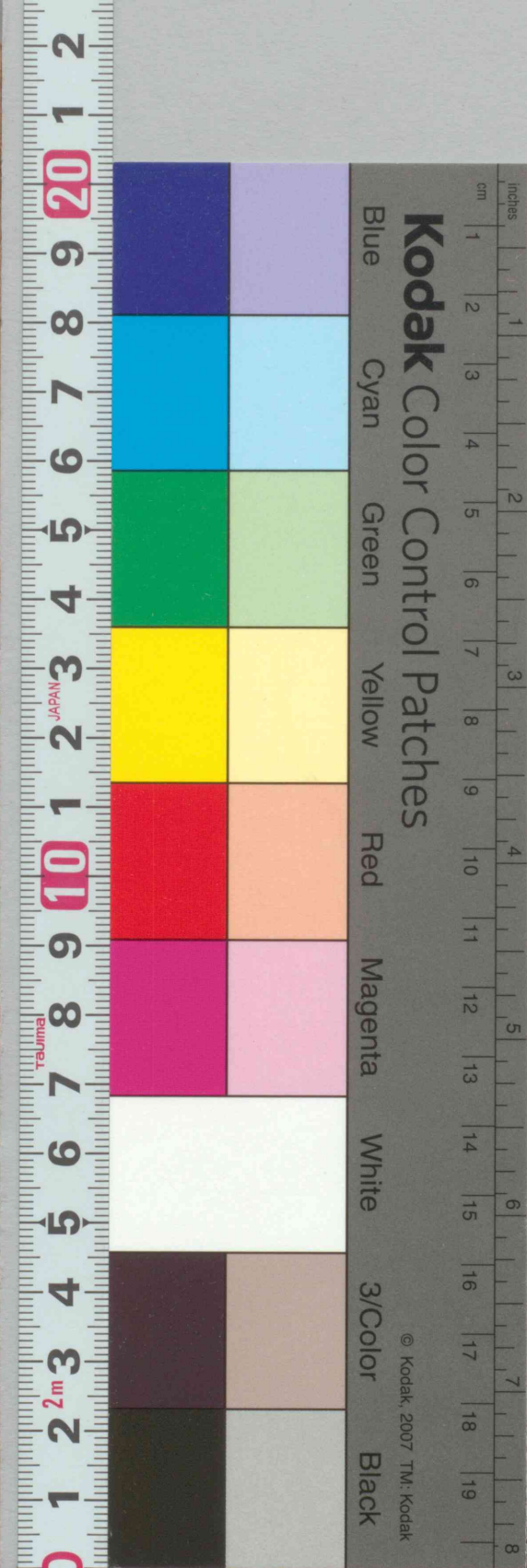
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



資料室  
中央図書館



明治實業讀本 卷の四

目次

一	東京(その一).....	一
二	東京(その二).....	五
三	温泉(漢文).....	九
四	事業の人.....	九
五	光陰有餘(漢文).....	一三
六	工業.....	一四
七	廣瀬中佐.....	一八
八	兼山放蛤蜊(漢文).....	二七

目次

375.9  
Iz 21

教科書文庫  
4  
810  
44-1909  
2000054290

明治實業讀本

東京 同文館藏版

文部省  
實業學務局  
泉屋清次郎  
中村康之助 共著

広島大学図書  
2000054290

九	日本の要港	二八
一〇	上海(漢文)	三四
一一	船室の記	三五
一二	汽車(漢文)	四〇
一三	自然界	四一
一四	留春の筵	四六
一五	英人の閑散と米人の多忙	四七
一六	牛董愛狗(漢文)	五〇
一七	柴田是眞	五一
一八	須磨明石(漢文)	五四
一九	軍艦の種類	五五

新書圖史中

二〇	元就戒諸子(漢文)	六一
二一	ポルトセッドより友人に寄する書	六三
二二	北海道海産(漢文)	六六
二三	畜産及び副業	六七
二四	甘薯先生(漢文)	七三
二五	松國論	七四
二六	三成奇智(漢文)	七八
二七	國運と人口	七九
二八	臺灣(漢文)	八四
二九	廣告文	八五
三〇	商人本色(漢文)	八八

三一 維新の原因およびその事蹟の概要……………八九

三二 處世の歌……………九八

三三 讀書(その一)……………一〇一

三四 讀書(その二)……………一〇七

明治實業讀本 卷の四目次終

明治實業讀本 卷の四

一 東京 (その一)

武藏野と呼びし遠き昔は知らず。 霸府の地となりてより、三百年の星霜を經、今また、茲に、今上天皇、都を奠め給ひてより、三十餘年の月日を重ねて、民草は繁りに繁り、榮えに榮えて、今や、まことに、東洋一の大帝京たるに恥ぢざるに至れり。

地勢は、西南は丘隴あひ連れども、東北は、概ね平坦なり。西南の丘隴あひ連れるところを、山、手といひ、東北の平坦な

奠都

市井

るところを、下町といへり。麴町・麻布・赤坂・四谷・牛込・小石川・本郷は山の手に屬し、神田・日本橋・京橋・下谷・淺草等は、下町に屬せり。下町は、江戸開市の後、夙に市井をかたちづくりて、繁盛を極めたれども、山手は、武士屋敷、その大半を占めたれば、なべて、物寂しきさまなりしが、維新以來、次第に開けて、多く町家たちつゞき、大に面目を革めぬ。されど、地勢もと偏阪にありて、交通の便、割合に宜しからざれば、盛に商業を營まんとするものは、大かた下町に住み、官吏・會社員の如きは、寧ろ、その靜閑なるを好みて、山手に住めり。

かくの如く、山手と下町とは、地勢の上より、自から區劃せらるゝのみならず、住者の多數異なれば、従つて、風俗もまた

偏阪

鄙陋

異なるところあり。下町は、風俗の變遷特に劇しく、時々流行、一にこゝに基を發し、山手は、常にこれを追はんとする傾あり。都市の端々隅々を場末といふ。多くは細民の住めるところなるが上に、城郷曲に接すれば、風俗、稍鄙陋にして、田舎じみたり。

交錯

街坊は、四通八達にして、大街・小巷、縱横交錯す。俚俗に京都は、碁盤割、江戸は、阿彌陀割といへども、地圖を繙いて見れば、その紛錯せること、阿彌陀割の比にあらず。殊に武士屋敷いよく、開けて、新道いよく、通じ、ますく、その紛雜を極む、古は八百八町と呼びしもの、今、千三百八十餘町と算するに至るなど、また、交通の便の日に進むを見るに足らずや。

通衢

通衢も、大かた迂曲して、北し、西し、或は東し、南す。されば都人は、常に東西を以て指さず、左右を以て辨ぜり。

下町は、すべて平坦なれども、山、手は、丘陵起伏するが故に、坂路また多く、騎乘に艱むこと少なからず。通衢は、いづれも幅廣けれども、その最、廣きを上野、淺草の兩廣小路とす。その整へるは、京橋の銀座通にして、一條の大通を劃して中央を車道とし、兩側を歩道とす。歩道は、あまねく瓦磚をしきつめたれば、雨天にも行潦の憂なし。かつ、柳を栽ゑ列ねたれば、炎暑燬くが如き日といへども、樹蔭の清涼掬すべきものあり。

されど、市街の一斑は、清潔なりといふ難し。比屋の高低

瓦磚

行潦

絡繹

泥濘

一ならず、軒竝また不揃にして、齊はず。常に人馬絡繹して、道さながらに悪しく、加ふるに、この地もと泥土にして、砂礫に富まざれば、例へば潮水退きて、海底の干上りたらんが如く、日照れば乾いて塵埃揚り、雨降れば泥濘糊を溶かすに似たり。殊に、風烈しき日には、塵埃天地を晦らし、草木これを被りて緑ならず、往來の人は、眼を開くに堪へず、衣裳また染みて黴色となることあり。

## 二 東京 (その二)

都下の區々、殆ど一市の姿をなさざるはなく、一區、概ね一二箇所の盛場所あり。そこには、飲食店あり、勸工場あり、寄

熱鬧

席あり、玉突、大弓等の店ありて、常に熱鬧を極む。例へば、上野、淺草の兩廣小路、京橋の銀座、通神田の小川町、通麴町の麴町、通牛込の神樂坂等の如きこれなり。

靈廟

公園も京橋麻布、赤坂、神田の四區を除く外は、各區にこれなきはなく、明治六年三月、上野を以てこれに充てしより、漸く増して、今十六箇所あり。就中、境域の最も廣大なるは、上野公園にして、十六萬九千百餘坪あり。これに次ぐは、芝公園にして、十四萬六千二百餘坪あり。一は古の東叡山、一は増上寺の地にして、共に徳川氏の靈廟のあるところなり。上野公園は、不忍池を擁して、風景絶佳。春時、櫻花を以て、いちじるしく、博物館、動物園等、また、此域内にあり。博覽會

幽趣

浩蕩

薨楹

雲聚

美術會、園藝會をはじめ、種々の展覧會、こもごも開かれ、四時遊覽の客、みちみりてり。芝公園は、増上寺山門の邊、青松おほく、朱門、翠影相映射し、頗る幽趣に富む。丸山の上よりは、東京灣を望み、碧波浩蕩のうち、に、風帆の出没するさま、自ら、胸襟を寛うす。淺草公園は、淺草寺の地にあり。觀音閣は、殿宇壯麗、丹碧こもごも輝き、薨楹頗る壯なり。都人の賽詣、星を趁うて雲聚す、仁王門前より、雷門の跡に至る間、仲見世と稱へて、兩側の煉瓦造の華舗、道を挟みて軒を列ね、多くは、簪、木偶、玩具、菓子、煎餅、あるは、錦繪、繪草紙の類を商へば、見世棚の新を列ね、奇を飾り、艷美を競うて、行人の眼を奪ふこと、一場の花壇に似たり。子は、すねて親にねたり、嬢は、袖を牽

いて母に求む。賽客も、旅人も、この處に手土産を購ふなど、殊に雜沓を極む。奥山は、古より百戯競ひ集り、見世物興行物の奇を鬪はし、が、今に至りて、いよゝ盛に、觀るもの堵の如し。その他、近郊には飛鳥山王子道灌山の三公園あり。いづれも勝境にして、杖を曳く遊客、常にたえず。

都下の戸口、歳を逐うて増加し、明治二十九年十二月の調査によれば、戸數二十九萬八千九百〇二戸、人口百三十六萬五千〇六十八人あり。もしそれ、人口を以て、全國市邑に比すれば、京都大阪名古屋横濱の四市を一にして對するも、なほ、これにおよばず。また盛ならずや。(平出鏗二郎)

### 三 温泉

相模之箱根伊豆之熱海、皆有温泉。均在山頂、林樹村落棋布於下、朝嵐夕霞、氣象萬變。而夏日晴雨不時、戶牖閒時、有雲氣往來。村民以竹爲筧、引泉至浴室。俗本喜浴温泉。云「可治疾」浴者益多。(日本國誌)

### 四 事業の人

一、勸勉なるを要す。規則正しく、事務に精だして、いかに繁忙なるも、倦まず、撓まず、骨身を惜まず、立ちはたらくをいふなり。心身の安逸を貪り、空想に耽り、烟草としたしみ、

繁忙



姑息

空談を好み、よろづ腰重く、姑息に流れ、今日なすべき事も、明日に譲るやうにては、事務、おのづから澁滞して、事業は擧らざるなり。

頭腦明確

一、果斷なるを要す。頭腦、明確にて、判斷力に富み、事の利害得失を識別し、機に臨み、變に應じ、斷行して惑はざるをいふなり。機會は汽車の如し。今くるかと思へば、忽、去つてその跡を見ず。優柔不斷、徒に恐れ、徒に惑ひ、狐疑し、躊躇し、思ひ切つて斷行すること能はざるやうにては、折角、好機會に遇ふとも、その機會を捉ふることも能はずして、事業は擧らざるなり。

狐疑

一、常識の完全なるを要す。ひろく世事に通じ、よく物

迂濶  
偏屈

の道理を辨へ、是非にあきらかに、事に處して、その當を得るをいふなり。常識、不十分なれば、迂濶となり、偏屈となり、判斷を誤り、應用を誤りて、事業は擧らざるなり。

遲鈍

一、機敏なるを要す。よしや、一を聞いて十を知るまでには至らずとも、よろづ悟りはやく、目先さとく、常によく機先を制するをいふなり。遲鈍なれば、事の間にあはず、萬事、人後に落ちて、事業は擧らざるなり。

餘裕

一、膽力あるを要す。おめず、臆せず、大事に臨んで駭かず、危急の際に、從容自若たる餘裕あるのいひなり。氣小に、臆病に、恐怖心、常に胸にみつるやうにては、氣象萎靡して、到底、大事を斷ずること能はず。卑屈となり、因循となり、引込

因循

思案のみして、事業は擧らざるなり。

一、確實なるを要す。堅く信を守り、然諾を重んじ、言行一致し、主義一貫し、人をして、たのもしと思はしむるをいふなり。輕薄にて、物事に忠實ならず、約を破り、信を缺き、誠心なくて、漫に小策略を廻すやうにては、信用、おのづからうせて、事業は擧らざるなり。

一、質素なるを要す。よく慾を抑へて、みづから奉ずること薄く、よろづ贅澤を謹み、費用を節するをいふなり。奢侈に耽りて、取れば取るほど、金足らず、遂には、苦しきまぎれに、不正手段を行ふに至るべく、弊害百出して、事業は擧らざるなり。

輕薄

贅澤

拘束

一、意志の強きを要す。ひとたび決心したることは、飽くまでも斷行し、區々たる情實に拘束せられざるをいふなり。情にもろく、氣の毒がる性質に富み、ただ、人をいたはり過ぎて、毫も冷靜なる所なく、障害に怖れ、失敗に屈するやうにては、到底競争に堪へずして、事業は擧らざるなり。

(大町桂月)

■ 光陰有餘

設<sub>セ</sub>涅<sub>ニ</sub>嘉<sub>カ</sub>曰<sub>ク</sub>、吾<sub>レ</sub>人<sub>ニ</sub>恒<sub>ニ</sub>歎<sub>ス</sub>光<sub>陰</sub>短<sub>促</sub>、不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>善<sub>ク</sub>用<sub>フ</sub>之<sub>ヲ</sub>、則<sub>チ</sub>常<sub>ニ</sub>足<sub>ル</sub>而<sub>シテ</sub>有<sub>リ</sub>餘<sub>リ</sub>、大<sub>ニ</sub>率<sub>テ</sub>人<sub>ヲ</sub>多<sub>ク</sub>虚<sub>ニ</sub>度<sub>シ</sub>光<sub>陰</sub>、或<sub>ハ</sub>多<sub>ク</sub>費<sub>シ</sub>之<sub>ヲ</sub>於<sub>テ</sub>無<sub>ク</sub>用<sub>フ</sub>之<sub>事</sub>、或<sub>ハ</sub>費<sub>シ</sub>之<sub>ヲ</sub>於<sub>テ</sub>過<sub>ニ</sub>惡<sub>ク</sub>之<sub>事</sub>、故<sub>ニ</sub>人<sub>生</sub>之<sub>長</sub>短<sub>ハ</sub>、當<sub>レ</sub>以<sub>テ</sub>功<sub>程</sub>揆<sub>ス</sub>之<sub>ヲ</sub>、不<sub>レ</sub>當<sub>レ</sub>以<sub>テ</sub>日<sub>月</sub>。

度之ル之コト (中村正直)

### 六 工業

工業とは、ある物を原料として、新なる種類の物を作り、又はある物に人工を加へて、新なる用法を生ぜしむる業をいふ。例へば、綿より絲を紡ぎ、甘蔗より砂糖を製するは、新なる種類の物を作り出す工業にして、鐵を鍛へ又は鑄て、種々なる器械を作るが如きは、新なる用法の物を作り出す工業なるが如し。

工業の原料となるべき品は、農業、牧畜、養禽、養蠶、養林、水産、鑛業等より生ずるものにして、これらの諸業は、工業と離る

*Hiroshima  
Commercial  
School  
Y. 2, B,  
In. Kajikawa.*

べからざるものなり。然れども工業の原料は、悉くこれを自國內にのみ仰ぎ得べきにあらず。現に英國の紡績絲は、亞米利加の綿を原料とし、亞米利加の絹織物は、日本、伊太利、支那の生絲を原料となせり。工業の原料品を産するは、多くは農業國なり。さて、その工業の力を以て、國民の經濟を保つ國を、工業國とはいふなり。

工業は、農業よりも天然力に依頼すること少きを以て、人智を要すること、更に大なり。農業は未開國に行はれ、工業は文明國に行はるといふは、この故なり。世界に名高き工業國は英國にして、造船、製鐵、羅紗織等は、その最も著しきものなり。英國は、鐵と石炭とに富み、國民また勤勉にしてそ

原動力

の業に勵み、政治の仕組もよく整へるを以て、その工業は、遂に今日の如き盛大を來すに至れるなり。英國につげるは、獨逸、白耳義、佛蘭西、北米合衆國等にして、皆盛大に工業を營めり。工業は農業の如く土地を要すること多からざれども、勞力を用ふること、頗る大なり。さて、人類の勞力のみによりて營む工業を、手工業といひ、原動力を用ひ、機械の働に乏しかりしかば、機械を案出して、その業を營むに至らず、こゝを以て、専ら手工業のみ行はれたりき。

そも、手工業は、仕事に手數を要すること多く、その出來ばえも均一ならず、且、一時に多量の品物を作る能はざる

が故に、これを機械工業に比すれば、その及ばざること多し。されど、又、仕事の種類によりては、せひに手工に依らざるを得ざるものあり。例へばかの刺繡彫刻等の如きこれなり。機械工業は、僅の費用を以て、幾個にても寸法品位の揃ひたる品物を、一時に、多量に作り出すものなれば、世の進むに従ひて、そのますます盛なるべきは、自然の道理なり。されば、かの従來手工業たりし靴製造業の如きも、近年米國にて機械製をはじめてより、各國皆これにならひ、わが國にても、漸次、機械製の靴を使用するに至りぬ。

機械業には、人の熟練に代るものと、勞力に代るものとあり。熟練に代る機械とは、製絲機械、織物機械等の如く種々

熟練

馬力

の巧なる働をなすものにして、その種類甚だ多く、一々枚舉に違あらず。又勞力に代る機械とは、蒸氣機械、電氣機械の如く、自ら發働して種々の機械を運轉するものにして、その力を稱して原動力といふ。原動力を計るには、通常馬力を以てす。一馬力とは、一分間に三萬三千磅の重量を、一英尺の高さにあげ得る力をいふなり。(實業雜誌)

七 廣瀨中佐

英雄

今や廣瀨中佐は、一代の崇拜をあつむる英雄となれり。詩人は彼に限なき歎美の語を與へ、音樂者は彼を謠ふの聲を絶たず。かくて彼は尊き軍神の號を冠せられたり。彼

英魂毅魄

の遺したる一塊の肉は、全國の老幼男女をして、襟を正うしてこれを迎へしめ、彼の傳記は、多大の興味を以て、青年に讀まれてあり。「花は櫻に人は武士」と、我らは彼において、まさにその眞意義を見ることを得たり。彼の英魂毅魄、以て瞑すべきなり。

爆沈

旅順口封鎖の計畫は、主として彼の商量に成れりといふ。しかして、彼は前後二回、自らその任に當りて、遂にこれに死したり。あゝ、武装せざる廢船に乗じて、敵の猛烈なる砲火を冒して港口に突入し、自らその船を爆沈せんとす。これ、もとより決死果敢の勇士にあらざれば能はず。彼は實にこの際に處して、驚くべき安靜沈着の態度を示したりき。

扁舟

以て彼が有する勇氣の眞價値を知るべし。昔、北歐スカン  
ヂナヴィアの諸王は、その年老いて死に瀕するや、一葉の扁  
舟に乗じて蒼海に浮び、自ら火を點じて舟と共に焼死する  
を喜びきとぞ。蓋、戰場に死なざるは人生の恥辱なりと、信  
ぜるを以てなりき。

兇暴

カーライルは、これを論じて「これ兇暴の勇氣なれども、そ  
のこれあるは全くなきに優る。勇氣の必要は、無限なり。  
人間は勇氣に依りて神となることを得べし」と、いひたりき。  
況んやわが廣瀨中佐の死は、かくの如き兇暴なる勇氣と、そ  
の選を異にせるをや。これ、彼が軍神として、一代の崇拜を  
鍾め得たる所以なり。

道德的恒心

彼の死状は、實にその壯烈を極めたりき。然れども、そは  
彼が人格の半面のみ。その總體にはあらず。おもふに、彼  
において認められたる最、崇美なる光輝は、その死生の際に  
發現したる、彼が道德的恒心の健全なる存在なり。彼既に  
その目的の地點に閉塞船を爆發し得たり。事は成れり。  
任務は終結せり。彼はその部下を端艇に乗り移らしめた  
り。決死の動機こゝに去りて、生を懷ふの動機漸く來らざ  
るを得ず。土のこの間に處するは、實に、最、難しとするこ  
ろ、しかも彼は生死、二つながら忘れたり。たゞその忘れざ  
るは、永久不滅なる人間の義務のみ。それ一兵曹の存亡は、  
彼において何の得失かあらむ。然も、彼は杉野兵曹長のあ

動機

沈没

らざる故を以て、三たび自ら端艇を出でて、沈没に垂むとする船内を搜索し、潮水、甲板を浸すに至りて、はじめて船を去りて歸航せむとせり。古の名將は、士卒と艱苦を同じうするに依りて、よくその心を攬りきと聞く。然れども、部下を救はんがために、自ら危険を冒すこと、廣瀬中佐の如きは、未だ曾て聞かざる所なり。聞く、彼、平生人に語りていはく、人を使役するは、自己を使役するの謂なり。世、豈自ら動かずして、人を動し得るものあらんや。余は乗員を見ること、なほ家族のごとし。故に、ひとり部下の手のみを勞せしむるは、余の甚、忍びざる所なり」と。彼が杉野兵曹長に眷戀したる至情は、すなはちこの思想の系統なり。エマーソンのネ

眷戀

擔保

ルソンを評したる語にいはく、ネルソンの生涯において、最、讚美すべきものは、偉大なる他愛心なり。これ、彼が極力保護するものによりて、極力保護せらるゝの擔保なり」と。ネルソンが英國軍人の理想的模範たるは、實にこれが爲めにあらずや。

然れども、博愛、義勇は、何ぞひとりネルソンの専ならむや。日本の武士道は、夙に軍人に教ふるに、義勇、博愛の道を以てせり。その一身を愛惜せずして國家に殉し、人の危難に赴き、もしくは弱を援け強を挫くを快とするは、要するに武士道によりて陶鑄せられたる日本軍人の氣質のみ。否、日本國民の理想のみ。廣瀬中佐は、大なる將軍にあらず。然れ

陶鑄

琴線

ども、彼は殆ど完全に、日本國民の理想を代表したり。彼は日本國民の感ずる所を感じ、思ふ所を思ひ、爲さんとする所を爲したり。しかして、その爲したる所は日本國民の心奥の琴線に、最、強く觸著するものなりしが故に、その國民を感動せしむること、しかく痛切なりしなり。

歸趣

彼は又軍國に對して、最、嚴肅なる信念を有したりき。彼の死にたるは、疑もなくこの信念の歸趣なり。蓋、彼の嘗て認めたる軍國は、彼をして楠公のいはゆる、「七生人間滅國賊」の語を誦せざるを得ざらしめたりき。しかして、彼はこれを古人の死語となさずして、現實に活ける咒文として誦したり。彼嘗て正氣の詩を作れり。その結末また、「七生人間」

咒文

抱負

戒律

魁偉

報國恩の文字あり。これ、彼において、最、確乎たる抱負の告白なりき。彼は實に露國と戦ふの日あるを豫期し、且、その戦の正當の要求なることも信じたりき。故に露國に往きてその言語を學び、その國情を研究し、以てひそかに時局の開展を待ちたり。しかして彼は自己の抱負に背かざる覺語を定むるに於て、殆ど、宗教的戒律に服するが如くなりき。余は彼の少年時代について、何事をも述べざるべし。ただ余をして彼の血統に關し、少しく語る所あらしめよ。これ彼の人格と、離るべからざる聯絡あるを以てなり。彼の曾祖父は、容貌魁偉、膂力人に絶し、且、砲術家として多少その名を知られ、又、祖父は、每朝米一俵を頭上に載せ、高下駄を穿



討幕勤王

きて、住宅の近傍數十町を散歩するを樂みたりといふ。知るべし、中佐の血管には、剛健の原質の遺傳せられたるものあるを。父の武重は、幕末の勤王家にして、同藩士小河一敏と相提携して、討幕勤王の大義を唱へ、王政維新の後には、人材登庸の選に入りて、判事に任ぜられたる人なり。加ふるに、氏は國學の素養ありて、識見また俗流を抜くものありきとぞ。知るべし、中佐の忠肝義膽は、父の薰陶に負ふところの多大なるべきを。

忠肝義膽

かくて、彼は不幸にして、はやく母に別れ、祖母の手に養育せられたりしが、この祖母は、また賢徳の譽高き婦人なりしを以て、その中佐に興へたる精神的感化の効、また、必、少から

琢磨

ざりしならむ。彼は實にかくの如き血統を有して、かくの如き家庭の間に成長したり。その家庭と血統とは、彼をしてその醇美の感情、剛健の氣力、忠君愛國の思想を受納せしむるに適したりといふべし。もし、それが自己の修養によりて、廣瀬家より得たる人格に、琢磨を加へて、圓滿完美なる日本軍人の典型を、長へに天地の間に留めたる三十七年の生涯に至りては、實に日本英雄傳の篇中に收めて、長くその光彩を傳ふべきものなり。(鳥谷部春江)

八 兼山放蛤蜊

野中兼山、土佐人也。嘗來江戸、及歸期也、致書鄉人曰、

自<sub>リ</sub>江<sub>ノ</sub>戶<sub>ノ</sub>齋<sub>シ</sub>歸<sub>ル</sub>惟<sub>ニ</sub>有<sub>リ</sub>蛤<sub>ノ</sub>蜊<sub>一</sub>艘<sub>耳</sub>海<sub>ノ</sub>路<sub>幸</sub>無<sub>シ</sub>恙<sub>以</sub>歸<sub>リ</sub>日<sub>ノ</sub>饋<sub>之</sub>衆<sub>以</sub>爲<sub>ス</sub>嘗<sub>ニ</sub>美<sub>味</sub>計<sub>日</sub>待<sub>歸</sub>既<sub>至</sub>則<sub>命</sub>投<sub>其</sub>所<sub>潛</sub>於<sub>城</sub>下<sub>海</sub>中<sub>不</sub>餘<sub>一</sub>箇<sub>衆</sub>怪<sub>問</sub>兼<sub>山</sub>笑<sub>曰</sub>此<sub>不</sub>獨<sub>饋</sub>諸<sub>卿</sub>使<sub>卿</sub>子<sub>孫</sub>亦<sub>飫</sub>之<sub>也</sub>自<sub>此</sub>後<sub>果</sub>多<sub>生</sub>蛤<sub>蜊</sub>遂<sub>爲</sub>名<sub>産</sub>衆<sub>始</sub>服<sub>其</sub>遠<sub>慮</sub>

九 日本<sub>ノ</sub>要<sub>港</sub>

通商

現今、海外諸國と通商貿易せる我が國要港中、その重なるものは、これを別ちて、二つとなす。一を普通貿易港と稱し、一を特別輸出港と稱す。普通貿易港とは、大阪・横濱・神戸・長崎・函館・新潟の六港にして、開港早く、且輸出入の貨物に制限なきものをいふ。特別輸出港とは、海國事業の必要に伴ひ、

漸次擴張せられたるものにして、その數二十に下らず。石炭・米穀・麥粉等の數種に限り輸出するを得る所なり。

互市場

大阪は、攝津の國にあり。大阪灣を擁し、淀川に臨み、近く神戸に接し、京都に連り、中國の要港たり。五港と並び稱せらるゝ互市場にして、帝國第一の商業地と稱せられ、又工業の中心地と稱へらる。古より難波の津と呼び、支那の貿易行はれたる所なり。紡績、及造船の業、盛大にして、酸硫、及曹達等の化學的工業、また大に發達せり。全國各地の物産、求めて得られざるなく、諸外國よりの輸入品、また大に備はる。東京を距ること百四十四里、鐵路凡<sub>ニ</sub>十六時半にして達すべし。

硫酸

丘陵

横濱は、武藏の南方にあり。後に丘陵を控へ、前に品川灣を望めり。もと泥洲を埋めて造れる地なり。五港の一にして、外國貿易の盛なること、全國に比なく、内外の船舶、常に灣内に輻湊し、輸出入の貨物、埠頭に堆積せられ、船舶の出入絶ゆることなし。その貿易の總額は、明治三十三年の調査によれば、輸出に於て九千六百十二萬五千二百七十六圓輸入に於て一億〇九百七十七萬五千三百十七圓に上り、實に全國貿易の半を占めたり。東京市より僅に八里、鐵路五十分にして達す。

埠頭

神戸は、攝津の國にあり。大阪に近く、市街、兵庫と相連れり。五港の一にして、貿易の盛なること横濱に次ぐ。この

寒村

地、古は寂寞たる寒村に過ぎざりしが、その開港場となりしより、戸數繁殖し、豪商の巨館、軒を並べ、全國有數の港とはなれり。東京を距ること百五十里、鐵路十七時間、横濱と相距ること海路、凡、三百里あり。

長崎は、肥前の國彼杵半島にあり。本邦五港の一にして、三百年前より支那、朝鮮、和蘭、西班牙等の諸外國と通商せる、最、古き貿易港なり。東京を距ること三百四十四里、神戸より海路三百八十里あり。

北門

函館は、北海道の南西端に位し、青森と相距ること僅に海路五十九里、五港の一にして、北門の要港たり。海産貿易の行はるゝ所にして、長崎に次ぎ、支那との貿易盛に行はる。

又、將來、露西亞との貿易盛なるべき有望の地たり。横濱より海上、凡、五百三十哩あり。

新潟は、越後の國にあり。五港の一なれども、その港、信濃川の長流、海に注ぎ、年々土砂港内に流出し、時々その淺深を變じ、航路を妨げ、不便少からず。従ひて船舶の出入少く、貿易極めて振はず。要するに、日本海岸は屈曲少く、太平洋海岸は屈曲多し。故に良津佳港と稱せらるゝものは、概、太平洋岸にあり。

良津

特別輸出港の重なるものは、下の關門司、口津、室蘭、唐津、小樽等となす。下の關は、一に赤間ヶ關と稱し、又、馬關ともいふ。本州の西端にありて、九州の門司と相對し、朝鮮支那の

終極點

方面、及、日本海より瀬戸内海への門戸に當る、軍事上、商業上の要害地にして、朝鮮支那との貿易大に行はれ、船舶の出入、甚、盛なり。門司は九州北端の要港にして、港内廣く、水深く、良好の碇泊地たり。此地、九州鐵道の基點にして、本州より九州に入るの門戸たり。口津は、肥前の國、島原半島の南端に位する良港にして、筑紫湯を隔て、肥後の三角港と相對す。共に特別輸出港なり。室蘭は、膽振國繪鞆岬の北岸に位す。灣内廣く、多數の船舶を容るゝに足る。この地、炭礦鐵道の終極點にして、北海道の石炭は多く、此處より輸出せらる。唐津は、肥前の西北岸にあり。玄海灘に臨める繁華なる要津なり。小樽は、後志の北岸にあり。日本海に瀕せ

る港にして、港内水深く、大船を繋ぐに適す。特別輸出港中、最北の地に位し、石炭を輸出し、又、石狩以北に於ける、同道過半の商權を握れる繁盛の市場なり。

この他、越中の伏木、伯耆の境、筑前の博多、琉球の那覇、對馬の嚴原、鹿見、佐須、奈丹後の宮津等も、米穀又は石炭の如き、或る物品に限り輸出し得る所にして、税關の出張所あり。又、臺灣にては、淡水、安平、基隆、打狗、鹿港、及澎湖島の媽宮の諸港、これに屬し、東洋貿易上樞要の良港なり。

樞要

一〇 上海

市街分三界。曰法租界、英租界、米租界。每界三國置警

察、邏卒、巡街警察。沿岸大路、各國公署、輪船公司、歐米銀行、會議堂、海關稅務署、架樓三四層、宏麗無比。街柱接二鐵線。一爲電信線、一爲電燈線。瓦斯燈、自來水道皆鐵爲之。馬車、洋製、人車、東製、有一輪車載二人、自後推之。大道五條稱馬路。中土市街、不容馬車。唯租界、康衢四通、可行馬車。故有此稱。市街間大路、概皆中上商店。隆棟回欄、丹碧煥發、百貨標榜、爛然眩目。人馬絡繹、晝夜喧闐。漢人紀上海殷賑、曰連街車馬達旦、笙歌海水爲沸、眞盡其狀。

(岡千仞)

一一 船室の記

喫烟室

わが乗れる船は、六層より成れり。第一層は甲板にして、この中に書籍室、及喫烟室あり。第二層第三層は客室なり。食堂は第三層の中にあり。湯殿、化粧室これに添ふ。それより以下は、下等船客、及荷物庫なり。第一層の上に、更に船橋を設く。こゝは機関師の外は上ることを許さず。

書籍室は、船の前方にあり。凡そ二十疊を敷くべし。目錄を備へて自在に閱覽する便を與ふ。椅子テーブルは行儀よくならべありて、自由にこれを使用することを得るのみならず、インキ・ペン・用紙・状袋をさへ備へあり、その他、新聞・雑誌も備へありて、居ながら歐米各國の近状も知らるゝなど、一たびこゝに入り、讀書に心をこむる時は、われながら洋

目錄

上の旅客たるを忘らるゝなり。

將棊

喫烟室は、船の後方にあり。これも凡そ十四五疊を敷くべし。いづこにも落機山の額を掲げたり。蓋、この航路と連絡せるカナダ鐵道の一斑を示せるなるべし。椅子、テーブルは例によりてならべられたれば、以てランプをなすべく、以て將棊をさすべく、以て酒を飲むべく、以て烟草をくゆらすべし。

藁蒲團

客室は、廣きは十疊より八疊ばかり、狭きは六疊ばかり、二人若くは三人を容るべし。寢室は壁に倚りて附けられ、底を鐵網にて張り、下に藁蒲團を敷き、更に毛布數枚を重ねてこれを蓋ふ。鏡臺・手洗鉢は、二人を容るゝ處には、必、二臺を

掃除

備へ、三人を容るゝ處には、必、三臺を備ふ。又テーブルあり、腰掛あり。朝起き出でて手洗ひ口嗽ぎ、鏡に向ひて容貌を整へ、外に出づるほどに、支那人のボーイ、必、來りてその跡を掃除し、夜具の如きは昨夜のと改めおかれて、その清潔なる、いふばかりなし。

獻立書

食堂は、廣さ百疊をも敷くべし。食卓椅子、正しく並びたり。食事毎に支那人のボーイ、客に活版に摺りたてたる獻立書を渡す。その種類、凡、三十品内外なり。客は好に依りて、それ〴〵申し付くるに、忽、その品を運び來るなど、その迅速なることおどろくに堪へたり。船體や、動搖するも、ボーイは巧に歩いて、スリーブ・ボミネー等を持ち運ぶに、すこし

旅愁

も過つことなし。この室の奥には、美麗なるピアノを備へて、乗客をして、これを弾じてその旅愁を慰めしむ。湯殿は化粧室と相隣れり。湯桶は大理石にて船形なり。水或は湯と記しある栓を引けば、わが思ふまゝの加減にたふることを得べし。浴し了れば、底の方より流れ去るやうにす。

水盥

化粧室もこゝに並びて、大理石の間に水盥を數多入れこみたり。例の向より出でたる小さき栓をひねれば、水は迸り出でて、見るまに盥に滿つ。また洋銀にて製せる筒の如きもの、盥の上ごとに、必、さし出でたり。これは石鹼を粉にしたるものにて、拇指にてその小さく出でたる處を押せば、

石鹼

さら〜と出づるを、手に受け、やがて水に和して洗ふやうにせり。

船中寒ければ、暖爐に火をたきて冬あるを忘れしめ、暑ければ小幕やうのもの、網附けたるを天井より下げ、それを動かして夏あるを忘れしむ。嗚呼、文明的航海の業もこゝに至りて極れるか。余はこれを船といはんより、むしろ太平洋上の極樂園といはんとす。歐米人の旅行を以て快樂の一に數ふるも、宜ならずや。(池邊義象著佛國風俗問答)

極樂園

一二 汽車

鐵路之制。用木長八九尺方七寸者、横鋪路上、每木相去二尺、兩旁釘鐵條成凹字形、以銜車軛。其行車也、前車載蒸氣機器、御者次之、次載貨物、次爲客車。廣可坐數十人。車有一等及二等三等之別。左右長椅。玻璃窓二十扇。啓閉隨手。汽笛一聲、衆車轉輪、時車行尙緩、四顧遊曠。漸進漸疾、電掣風馳、兩邊村落、若飛鳥之過眼、山水樹石、滾轉不止、過橋梁入竇道、亦不得而知。(川田剛)

一三 自然界

園に一株の梅樹あり。年々花開き花散りて、新緑の時節





被覆

に至れば、數箇のあぶらむし何處よりか現れ出でて、梅の新芽に寄生す。仔細にこれを觀察するに、これ、皆雌なり。この雌は、雄なくして頻に細小なる小蟲を産む。この子蟲は、暫時の間に生成して、親と等しき雌となり、忽、又、夥多の子蟲を産み始む。かくの如く、子蟲、又、子蟲、際限もなく繁殖するを以て、數日ならざるに、數百千の大數に増殖し、梅樹の新梢は、全くこの蟲を以て被覆せらるゝに至れり。

奴隸

さて、又、此處に現れ出でてたるは、蟻なり。蟻は蟲類中の開化したるものにして、社會を組成して生活し、遠近に出没して食物を採取し、或は戰爭を爲し、或は奴隸を使用するのみならず、進んでは家畜を養ひ、田を耕すものすらあり。あぶ

群集

らむしは、即、蟻の家畜にして、多少、蟻の保護を受くる者なり。今や、蟻は梅樹の新梢に群集する所のあぶらむしをして、その消化器より甘味の液を分泌せしめて、己はこれを收拾すること、猶、吾人の牛乳を搾り取るが如し。

修羅場

然るに此處に卵を産み附け置きしと見え、數多の子蟲これより孵化せり。この子蟲はあぶらむしを以つて最好の餌食となすが故に、あぶらむしに取りては、最、恐るべき強敵なり。今その有様を譬ふれば、猛獸、市街に横行して、人類を噛み殺すに等しく、梅樹の梢に慘憺なる修羅場を現出するに至れり。

又、梅樹に程遠からぬ處に、ありのぢごくとしてうすばかげ

播鉢

らうと稱する蜻蛉の小蟲數多ありて、直徑二寸程の播鉢形の穴を地面に堀り、蟻を陥れてこれを餌食にせむと待ち構へたり。蟻は四方に敵を引き受けたれども、茲に又蟻の爲に不意の味方ぞ出て來りける。そは余の飼養せる家雞なり。家雞はありのちごくをことごとく喰ひ盡して、その痕跡をも留めしめず。然るに、こゝに又數頭の浪犬あり。家雞を見て好餌食こそ現出したれと、頻にこれを捕獲せんとなす。こゝに於てか、一は家雞を保護せむため、一は家雞の植物を害するを防がんため、竹柵を設けてその中に飼養せしに、數多のありのちごくは再現して、諸處に窠を造り、蟻を陥れんと企て居るを認めたり。

痕跡

竹柵

塞翁の馬

凡、禍福の前知し難く、利害の預期し易からざるを、人間萬事塞翁の馬とは、世人の常に口にする所なるが、前述の如き一小活歴史に因りて、自然界の現況を窺ふに、何事が禍となり福となるか、何者が利となり害となるか、その影響は如何なる處まで波及すべきか、決して簡單なる次第にあらざるを知るなり。試に思へ、我が梅樹を植ゑて花を見、果實を得むと欲すれば、あぶらむしありてこれを害し、又蟻ありてその害蟲を保護す。これ、皆、余を妨ぐる者なり。而しててんとむしありてあぶらむしを食ひ、ありのちごくありて蟻を殺す。これ、皆、余を助くるものなり。然るに他の必要を以て我が飼養する所の家雞は、その主人の利を思はずして

救援

潜伏

余を助くるありのちごくを食ひ盡し、余を妨ぐる蟻を間接に救援せり。こゝに犬難を避けん爲に家雞を柵中に入れしは、意外にもありのちごくを繁殖せしむる策となりて、最初に植ゑたる我が目的を、幾分か助けたりと言はざるを得ざるなり。蓋、犬と梅樹、家雞と蟻、余とてんと一むしとの間、豫期せざる場處に、複雑なる關係の潜伏し居りて、遂に共に意想外の利害禍福を分擔するに至れるは、豈亦奇ならずや。

(箕作佳吉)

### 一四 留春の筵

肅啓、水は流れ、花は浮び、絮は薄く、胸中の恨愁禁ずべから

ず。依りて明日は親朋三四打寄りて、留春の筵を設け度と存候。幸ひ行く春の名残として、大久保の躑躅花は今を盛りと咲出で候へば、同所巡遊、田野に出でて、鶯飛び草長ずる風趣を見、後、拙宅に立戻り候はんには、黄昏の風、簾を隔て、吹き來るの詩趣あらん。茶を喫し、甘を食うて、一宵を送るも、亦、我黨の風流ならん。午後二時、大久保停車場迄御出被下度同處にて待合可申、萬期拜光候。(竹越與三郎著、三又手翰)

### 一五 英人の閑散と米人の多忙

英人は、閑散を装うて、之を人に誇り、米人は、多忙を装うて、之を人に示すとの話なり。英國にては、貴族その他有福な

遊獵

る家の子弟は、商賣をなさざるも、生計に差支を生ぜざることなれば、常に遊獵等に日を消して、その無事閑散なるは勿論なれども、その然ると然らざるとに論なく、業務に役々たらざるの風を爲し、且、人に對するの挨拶にも、近來のお樂みは何ですか」と問ふの風なり。

米人は、之に反して、實際に左程の用事なき人にて、外形には、その義務交際共に多端にして、恰も忙殺せらるゝかの如くに装ふの風あり。人に向つて挨拶するにも、相變らず御多忙ですか」といふを以て禮となす。

例へば、米人が停車場に到り、汽車の出發迄に、尙十五分の閑あらんか。彼は獨語して「此間に、一寸髯を剃らんとて、理

忙殺

髮店に入り、之をそりて、なほ五分間餘れりとせば、又、獨語して「この間に履を磨かん」といふの流義あり。或る米人余に向うて「英國の銀行員は、午飯の時に居を出て食店に入り、卓に倚りて悠然食を了り、別室に茶を喫しながら、談笑若くは遊戯する等、前後一二時を費したる後、歸店して再び事務を執るを常とす。然れども紐育にては、店員等は、食店内の卓上に積みあげたる肉片を立食し、匆々歸店して事務に就くの有様なれば、消化のために、暫時の休息をも爲すことを得ず」といへり。余は之に問うて「然らば、事務終り店を閉ぢて歸宅するは、何時なりや」と問へば「午後の三時なり」と答ふ。余は再問して「然らば、午飯の爲めに一時間を費して、悠然之

を終り、その代りに、退散時を四時となさば如何」といへるに、  
「共同金庫も閉鎖は三時なれば、それ迄に各店共に事務を結  
了せざるべからず」と答へけるゆゑ、然らば、金庫會社も、共に  
四時迄營業することゝ改めなば、可なるに非ずや」とて、共に  
笑ひしことあり。(鎌田榮吉)

一六 牛董愛狗

牛董性度溫和、遇意外之事、不動聲色。一日牛董出書  
室、歸則見其所愛之狗、蹴倒火燭、案上堆紙悉成灰燼。蓋  
積年所刻苦、測算者也。牛董既老、知不可復再、痛惜不措。  
然不加一毆打。特睨狗曰、汝作害千人、而汝不自知乎、嗚

呼」(中村正直)

一七 柴田是真

噴々の譽

柴田是真、幼名龜太郎、のち順藏と改む。その居を對柳と  
號す。江戸の人。若うして古満寛哉の弟子となりて、蒔繪  
を學び、また鈴木南嶺に就きて、繪畫を學ぶ。南嶺は渡邊南  
岳の門より出て、江戸にありて、圓山風を畫けるものなり。  
その頃、四條派の畫家には、京の岡本豊彦、噴々の譽あり。圓  
山と四條とは、もとより兄弟の親ありといふべく、是真は二  
十四歳の時、南岳の紹介により、西上して豊彦の門に入る。  
かくて京にありて、その地、及、奈良の古名品を觀察して、研勵

一機軸

刻苦大に得るところあり。師法を蟬脱して、別に一機軸を出し、傳彩鮮麗、意匠斬新、江戸に歸りて聲名日に揚る。

蓋、是眞の最、長ずるところは蒔繪にあり。古來中絶したる青海髹を發明し、なほその道の發達に資したること多し。また漆を以て、紙絹の上に畫くことも、初めたるが、このいはゆる漆繪は、多く行はれず。その畫は、古今雅俗の諸風を、己が藥籠に收めて描きいだすところ、概、好趣あり。多く團扇、摺物類の下繪を畫いて、俳味に富む。その畫の俳味あるもの、江戸には既に酒井抱一あり、是眞これに次ぎ、洒脱の筆、清新の色、些少の物を寫して逸興紙面に溢る。恰も十七字の短詩なほよく人を動かすに似たり。明治五年、命を受けて

好趣

洒脱

放逸

延遼館の壁畫を作り、下りて二十四年、八十五歳にして歿す。是眞の京都に遊學するや、宋の李龍眠が筆になれりと稱する、東福寺境内、三聖寺の十六羅漢圖幅を見て、深くその妙技に感じ、後、その畫幅の賣却せらるゝを聞き、家財を賣り盡してこれを得たり。人その道に篤きを稱す。是眞、性、至孝にして謹嚴、母の教を守りて、常に紋附黒羽二重の羽織を着し、曾て品位を崩さず。當時、河鍋曉齋は、是眞と相並んで都下流行の兩大關と稱すべし。されど是眞は、曉齋が放逸にして罪を得たるを惡み、これと伍するを耻ぢて、請へども面せず。人あり、この二大家をして各一幀を畫かしめて對幅を作らんとす。是眞、大喝して曰く、豈、天下の罪人と筆を列

懷舊

忸怩

ねんや」と。是眞また老年に至りて京都に赴き、壯時同窓の畫家鹽川文麟と、鴨涯の酒亭に會し、紫山明水を望んで轉懷舊の念に堪へず。文麟顧みて曰く、「子、東京の繁華を誇るといへども、今この景に對すれば則ち如何」。是眞徐に答へて曰く、「しかも日夕この絶景を見るところの子の畫は如何」と。文麟忸怩たり。(藤岡作太郎著、近世繪畫史)

一八 須磨明石

余欲巡覽沿海諸勝、求船於浪華。皆答非薄、暮不發。屢求之皆然。遂發。垂及神戸、日全沒。海波如熨、明月在東。舟行甚駛、望見須磨明石於煙靄杳茫中。其白者是砂、黑者是

是松耳。汀渚之曲折、屋舍之疏密、不得詳也。夜半起、倚舷端、放眸遊眺、纖波溶金、微風不動、亦絶景也。

(依田百川)

一九 軍艦の種類

海軍の主力は、軍艦なり。軍艦の任務は、複雑なるが故に、その目的によりて、種々なる艦船を要す。軍艦類別の法は、各國多少の差異あれども、我國の定むる所は下の如し。

(一) 戦艦 艦隊の中堅となり、敵艦隊の主力と對抗して、これを撃破するを任務とす。故に堅艦を破壊するに足るべき攻撃力と、敵の猛烈なる砲火を防ぐに足るべき防禦力とを

防禦力

排水量

備へざるべからず。随つて、主砲、副砲、共に強大多數にして、機關室、砲塔、司令塔、彈藥庫、舵機等、船體の要部は、甲鐵を以て保護せらる。速力の快駛、載炭量の豊裕、亦望む所なれども、爲に攻防の二力を減殺すべからず。排水量一萬噸以上を一等戰艦とし、以下を二等とす。三笠、朝日、相模等は我海軍の戰艦なり。

航續力

(二) 巡洋艦 装甲、及、非装甲の二種あり。装甲巡洋艦の精良なるものは、攻防二力に於て、戰艦に拮抗して、能く敵の主力と戦ひ得るのみならず、速力、航續力、共に大にして、用務極めて廣きものとす。日露戰役に於ける浦鹽艦隊の活動は、その一例なり。非装甲巡洋艦は、主として敵の運送船を捕獲

吃水

し、我商船運送船を保護し、わが艦隊の斥候、耳目となりて、敵の動靜を偵察し、又敵の巡洋艦と對抗す。七千噸以上を一等とし、七千噸以下三千五百噸までを二等とし、以下を三等とす。出雲、松島、和泉等の如し、  
(三) 海防艦 主として海岸防禦を任務とする軍艦にして、攻撃力を第一とし、防禦力、速力、これに次ぐ。沿岸淺水中に活動せざるべからざるが故に、力めて淺吃水を要す。亦、一等より三等に至るまでの等級あり。巡洋艦の制に同じ。比叻、高雄等の如し。  
(四) 砲艦 主として港灣の防禦に充つ。又、河川を溯り、島嶼の間に出没して、敵地の沿岸を攻撃する任務を有するが故



偵察

に、艦形小さく吃水淺きに拘らず、頗る大なる主砲を載す。これ砲艦の名ある所以なり。防禦力・速力、共に多く意とせず、千噸以上を一等とし、以下を二等とす。赤城・操江の如し。

(五)通報艦 艦隊の傳令・偵察等を任務とし、又、巡洋艦を補佐す。艦型・防禦力、共に小なれども、速力、及、航續力は大なり。

八重山・千早等、これなり。

(六)水雷驅逐艦 水雷艇の大型なるものにして、數多の速射砲を備へ、これを以て、敵の水雷艇を驅逐し、尙、進んで水雷を發射して、敵の大艦を襲撃するものとす。故に速力も水雷艇より一層大に、又、單獨、大洋を遠航し得べきものとす。排水量は、通常三四百噸にして、速力は三十節前後なり。日露

漣

濃霧

戰爭に於ける、春雨・漣以下の各艦の偉功は、人の耳目に新しき所なり。

(七)水雷艇 薄き銅板を以て構造す。駛行、甚、輕快なる小艇にして、暗夜・雨雪・濃霧等に乘じ、又は戰鬪中砲烟の下をくゞりて敵艦に近づき、水雷を發射するを任務とす。その怖るべきは、日清戰爭以降、萬人の認むる所となれり。多くは艦隊に附屬し、小なるものは艦船にも塔載せらる。

(八)潜水艇 水雷艇の一種にして、最近の發明なり。はじめ佛國にて製造せられ、米國・英國、その他各國も採用せり。進んで敵艦を攻撃せんとする時、又は敵の發見を避けんとする時は、忽ち海中に沈入して、殆どその姿を隠し、潛に敵艦に

母艦

近づき、水雷を發射す。これを防禦する方法未だ研究を經ずといへば、各國争うてこれを具ふるに至らば、將來の海戦上に大なる變化を來すべし。

(九) 水雷母艦　水雷艇は、その形甚、小にして、炭水糧食の貯量僅小なるが故に、單獨遠航に堪へず。よつてその食庫として、水雷母艦を隨へ、右の物質、及水雷の供給を受く。豊橋はこれなり。

以上九種の外、測量艦、練習艦、工作船、病院船、及補助巡洋艦等あり。或は平時に、或は戦時に、それらの任務を有す。

就中、補助巡洋艦は、戦時商船中、構造の堅牢にして、速力の大なるものを徵發して、武装せしめ、敵船の捕拿、偵察等、巡洋艦

捕拿

の任務を執らしむるものなり。日清戦役の西京丸、日露戦役の佐渡丸など、偉功を奏せるは衆人の記憶せる所なり。

さて、軍艦の艦隊に編入せられ、又は警備練習、測量、その他特別の役務に服するものは、これを在役艦と稱し、その役務を解かれたるものは、豫備艦といふ。

艦隊とは、軍艦二隻以上を編制したるもの、稱にして、必要に應じて、水雷艇、潜水艇、水雷敷設船、運送船、病院船、工作船等を附す。數艦隊を聯合せるものを聯合艦隊と呼ぶ。艦隊には、司令長官及び司令官を置く。その乗艦を旗艦と稱す。

軍艦は、國際法に據り、外務に關して左の特權を有するも

特權

のとす。

一、軍艦は、外國政府の干涉を受くることなし。もし強ひて干涉せらるゝことあれば、兵力を以てこれを拒むことを得。

二、軍艦は外國の法權に服従せず。随つて外國の警察權・裁判權・臨檢權・搜查權等を艦内に行ふを許さず。

三、軍艦は外國に對して納税の義務なし。

四、軍艦は主權に伴ふ尊敬と禮遇とを受くべきものとす。

禮遇

(明治讀本)

二〇 元就戒諸子

元就病將死。致諸子於前。取箭數條。一如其子數。自糾

爲一束。極力折之。不能折也。單抽其一條。隨折隨斷。因戒曰。兄弟猶此箭也。和則相依濟事。不利則各敗。汝等勿忘。隆景進曰。夫兄弟之爭。必起於欲。棄欲思義。何不和之有。元就悅曰。宜從仲兄之言。(中村和)

二一 ポートセッドより友人に寄する書

先便セイロンよりの拙書、さだめて御落手のことゝ存じ候。爾來、船足恙なく、アデンを過ぎ、スエズを過ぎて、昨夜ポートセッドに安着いたし候。こゝは御承知の如く、埃及の東北端にある一小市にて、地中海の入口に候へば、身は今まさに歐亞弗三洲の境界の上になてるにて候。

衰弊

多年夢寐の間に往來せし歐洲の地も、はや指顧の間にせまりたれば、一行の人々皆勇みよろこびて、滿船、何となう氣も浮きたちて見ゆるを、不思議や、生はたゞ限なき怨恨、悲愁の思に、ひとり胸のみいたため居り候。

そは、はじめ香港を過ぎて、清國衰弊の状を見しに起り、中頃印度に入りて、その亡國の跡を吊ひしに養はれ、今またここに來て、埃及國の貧弱を哀むによりて、全く除くべからざる心中の苦となりはてたるにて候。

行客

盛者必衰の習とはいひながら、はやく五千年の昔にありて、その文化を世界に誇りたりし國の、今はたゞその形骸をとゞめて、尖塔・堂閣の美、纔に行客の憐を買ふに過ぎざるな

荒寥

ど、いかにも悽慘の事に候はずや。嗚呼これ國民の罪か、抑天道の循環またいかにもすべからざる數か。これを思ひ、かれを思へば、まことに感慨に堪へざる次第に候。

わが船の運河を過ぎしは、日既に三稜洲に落ちて、夕月の影はや沙上にほの見ゆる頃にて候ひき。月は白く、沙は赭く、近き丘のみ黒く、時つ中を、一隊の土人の、駱駝に跨りて逍遙する様の奇なる、その寂寞荒寥の景、殆ど形狀すべからず。室に入りて寢に就けば、玻璃窓圓く月光をやどし、婆娑たるその影、枕頭に往來して、終宵眠ること能はず候ひき。

その翌日、ポルトセッドに着き候ひしが、夕ぐれになりて、一葉の小舟わが船の下に漕ぎ來れり。中には一人の美人

征衣

ありて、人々の投げ與ふる錢をば傘にて受けとめ、胡弓に似たる樂器を弾き候ひき。さてもその音の悲しさ、泣くが如く恨むるが如く、はては訴ふるが如く、心なき人々すらも、そぞろに征衣を濕し候ひき。生は、はやたへかねて、いそぎ船房に退き、ひとり展轉の思に一夜をあかし候。

運河の光景、レセツプスの偉業、その他、しるすべきこと少からねど、今は筆とるに堪へず、なにも後便に譲り候勿々。

(中學讀本)

二二二 北海道海産

北海道海産、取之無禁、用之不竭。近以人工養育、生生不窮。其輸出清國、亦逐年加增、遂爲國產一大宗。所輸出

逐歲

多乾脯之類。近學西法、以熟肉盛錫罐中、竟能千里齎行。不至餒敗云。(日本國志)

二二三 畜産及び副業

耕種のみに依りて經綸する時は、凶年に遭遇して作物登らざるときは、全く收入を失ふ虞あり。又、養畜のみに依りて營業する時は、畜疫等に由りて家畜斃死するときは、全く資産を失ひ、或は高利の負債を起し、或は破産することあれども、二業を并せ營めば、相互輔翼するを以て、かくの如き憂なく、年々收入の平均を得しむる益あり。加之、畜産業を兼ねれば、地力維持に容易なるは言を俟たざるなり。わが邦

遭遇

輔翼

隆起

にては、養畜は從來盛ならざりしと雖、今後は、これを隆起せしめざるべからず。何となれば、畜産物の價格は年年騰貴し、且、外國の實例に據れば、穀物は他國の競争を受け易けれども、畜産物はこの憂少ければなり。

馬の繁殖を行ふには、高價の種馬を要すれば、官業又は大農にあらざれば營み難し。小農においても、農用の牝馬に由りて、繁殖することは、政府の種馬を借り、或は組合にて種馬を購入使用する便あるときは、これを營むを得べし。概すれば、牧馬は原野多き地に粗放に經營すべきものとす。世には、自家に生れし仔馬、又は他より購入せしものを育成することありと雖も、育馬には、特殊の知識・經驗を要し、飼育

購入

肥膩

に缺點あれば、終に無價の惡馬となる虞あるを以て、育馬は寧ろ冒險の事業なり。これを以て、この業は數年營みて經驗あるもの、外行ふべからず。養牛は牧馬よりも容易にして、且、生産物の販路も、汎ければ、外國にては、牛は馬よりも多く飼養せらる。養牛の目的には、繁殖・肥膩および搾乳あり。繁殖は經驗と資本とを要すれば、普通農家の行ふべきものにあらず、普通の農家は、幼牛を購ひて育成せしむるを利とす。肥膩は瘠牛を購入して、これを肥膩せしめて、屠畜者に販ぐ業なり。都會の近傍にして、飼料を得易き處、例へば製造所等の附近に營むに適す。わが邦に於ては、乳脂・乾酪の需用多からず。唯、生乳のみ需用せらるゝを以て、搾乳

業は都會の近傍にのみ營まる。

豚は、注意を要すること少なき家畜なれば、大小孰れの經營にも適すべし。然れども、豚肉は、尙、未だ高價ならざれば、他に用途ある飼料を買入れて、これを飼育すれば利なし。豚の繁殖は、大農これを行ふべく、小農は仔豚を買入れて飼育するを利とす。

庖厨 枯渴

家畜の生産物は、販路汎しと雖も、他より食料を購入して、多數にこれを飼ふは不利なり。自家の庖厨、農庭の廢棄物にて、養はるゝだけの數に止むべし。家禽を飼ふときは、時々現金を收入する機會あるを以て、金融枯渴せる小農には殊に便利なりとす。

對照

中庸

歐洲にては、農家の飼養し得べき家畜の數を定むるには、牛・馬・羊・豚の體量を、大牛の體量に改算し、而して圃より收むべき牧草飼料の量と對照して算出す。即、牛一頭は、馬の三分の二、羊の十、豚の四、山羊の十二、驢の一頭に相當するものとして計算す。然れども、通常家禽は體の小なる故を以て、この計算には加へられず。通常中庸の土性ならば、大牛一頭を飼ふに、一、七五ヘクタール、乃至、二ヘクタールの土地を要すと定めらる。

養蠶は、注意を要する業なれば、小經營に適するものにして、大經營に適せず。養蠶を營むときは、自園より收むべき桑量、又は確に使用し得らるゝ桑量に應じて、飼育すべき蠶

隨意

量を定むべし。隨時他より桑葉を買入るゝ豫定を以て、漫に過多の蟻量を掃立つるは、甚危険なり。又、養蠶の節は、すべて農事の繁忙なるときなれば、勞力の供給をも、豫め調査せざるべからず。秋蠶の飼育は、春蠶に比すれば、農事繁忙ならざるときなれば、勞力の關係に於ては利益多し。

蜜蜂の食料は花にして、花は隨意に増加するを得ざれば、飼育すべき蜜蜂の數はその地方に存する花の量に由る。これを飼育するには、殆ど勞力を要せざれども、この事あるがために大經營に行ふを得ざらしむ。

今日、各地方に行はるゝ農家副業の重なるものは、澱粉・藍玉・苧・製紙・製絲・麥稈・眞田・花・蕪・藁・細工等の手工業とす。副業

閑散

の利益は、主として農事閑散の際、勞力を利用するにあれども、製造の種類によりては、廢棄物中に植物養料を留め、地力の維持に便ならしむる益あり。副業中、特種の事由ありて營まるゝものは格別なれども、然らざるときは、冬間の勞力を利用するに便なる副業を選むべし。(澤村眞)

二四 甘薯先生

青木昆陽、出伊藤東涯門、其學一志有用、於經義文章、不必究思、嘗嘆曰、凡有罪非死刑者、遠放之島嶼、要在使其終天年耳。然諸島少五穀、常以海產木實給食、是以往

天年



蕃薯

稔

往不能免餓死。豈不亦痛哉。又雖種藝之地。遇凶歲。即民不能無菜色。意者百穀之外。可以當穀者。莫如蕃薯也。即陳官求種子于薩摩。試種之。宦藥苑中。則極蕃衍。於是。以國字著蕃薯考一卷。而演其培植之法。官鏤版。併種子。下諸島及諸州。未數年。無處不種。至今上下便之。雖歲不稔。民不餓者。實昆陽之惠。及無窮矣。題其墓門之碑。曰甘薯先生之墓。有以哉。原善

二五 松國論

松柏科の植物は、わが國中到る處に繁殖して、その翠葉の

對象

優麗

轟々

美を競へり。余はこれを見るごとに、常におもへらく、「これ以てわが日本國民の氣象を涵養すべき恰好の對象なり」と。邦人まゝ、櫻花を以てわれらの性情を代表せしめんとす。げにその美にして艶なると、その散るに潔きとは、以てわが國民の美性の一部を代表せしむるに足れり。されど、以てその全斑の代表者たらしめんとするに至りては、余は決してこれに首肯すること能はざるなり。要するに、それは優麗なるのみ、可憐なるのみ。

松歪科の植物は、然らず。その隆冬に逢うて凋落せざるの節操、既に以てその氣象の強健なるを見るべし。更にその轟々たる樹幹の趣を見よ。孤高、天を衝いて扶持みづか

斷崖  
絶壁

ら守るの節操、何ぞそれ高邁なる。しかもその風姿は、またよく幾何學的なると共に、よく美術的なり。高雅の趣、何物かそもこれに比すべき。しかして、これをして土壤少量に、四圍の境遇、極めて順ならざるの逆境に立たしめんか。斷崖、絶壁、石面、稜層の間に立ちて、なほかつその豪氣を屈せず、よくその稜々たるの奇骨を發揮し來るにあらずや。これ、到底、他の凡庸なる植物の企て及ぶべきところにあらざるなり。

不羈

瑞西の歴史を説くもの、必、その不羈獨立を酷愛する民人の歴史なるをいはざるはなし。しかして、彼等は實にその國に固有なる、松林中に生育せる人民にあらずや。知るべ

山毛櫸  
橄欖

し、松が民人の性情を感化するの、極めて大なるを。わが國の松柏科植物に富めることは、實に世界第一なり。英吉利人をして、その櫛を、蘇格蘭人をして、その山毛櫸を、伊太利人、西班牙人をして、その橄欖を誇らしむの權利を認むるものは、またわが國人の松柏科植物を誇るの權利を認めざるべからず。

怒濤

試に、西對馬の海岸を過ぎて、その懸崖百尺、西風蓬蓬、怒濤洶々たる處、老松の矗直空を凌ぎ、欹斜水に躍るの狀を觀よ。誰かまた、かの州の目代、七郎宗國が、慨然八十餘騎を率ゐて、胡元の戦艦九百餘艘を反撃し、その三子と共に、身を以て國に殉じたるの壯貌に想ひ到らざるものあらむ。

壯貌

あゝ、日本は松國たるべし。櫻花國たると相待たざるべからず。(志賀重昂)

二六 三成奇智

豐公秀吉嘗放鷹於野渴甚。投一僧寺乞茶太急。有行童進一大碗。茶微溫。盛到七八分。公一喫稱快。更進一碗。少熱不滿半碗。公徐喫了。又要一碗。於是代以小碗。太熱不可遽口。公愛其才敏。請之住持僧携歸。以爲小臣。漸愛寵之。後竟列爲五奉行。治部少輔石田三成是也。

(大槻清崇)

微温

二七 國運と人口

わが邦が、世界の競争場裏に投ぜられてよりこゝに四十餘年、國運は駸々としてその興隆の運に向へり。余は敢て政體の變化と物質的の進歩とを以て、これを徵せざるべしかの人口の増加の一事を以てして、よくその盛運を卜し得べしと信ず。

およそ、國の興廢は、人口の盛衰を以て、その基となすものなり。他の文物はいかに優れたりとも、その人口にして衰退の兆あらむか。その國の運命は、極めてたのみ少きものなり。

かの古の羅馬を見よ。その版圖、歐洲より延いて亞細亞

興隆

境域

繁殖力

亞非利加の二洲に及び、文物の盛なる、また他にその比を見ざる盛況を呈せしも、遂にそのはかなき滅亡を免るゝこと能はざりしにあらざや。しかして、その主なる原因は、人口の衰退にありきといふは、史家の常に説くところなり。

今や、天然の勢力と人力の發明と相待ちて、世界は、混一の社會となり了らんとす。國の境域は、河海・山嶽の、よくこれを規すること能はざるにいたれり。こゝにおいてか、各人種の間における競争は、ますますその激烈なるを加へ來らんとす。しかして、その平和の戦において、最、有力なる武器は、その人種の繁殖力なりといはざるべからず。試にいはんか、かの歐米の世界において、ゲルマン人種は、最強く、スラ

ープ人種これにつき、しかしてラテン人種は、最、弱き現象を示せり。これやがて、その一大明證にあらざや。

伯仲

學術・工藝・技術・商業、すべてこれら有形の文明を組織する所以の事物をとりて、これを較すれば、ラテン人種の代表者たる佛國と、ゲルマン人種の代表者たる英・獨二國とは、その力まさに伯仲の間にあり。しかり、佛國は決して歩を二國に譲るものにあらず。更にまた、これをスラープ人種の代表者たる露國に比するに、誰か佛國の露國に勝れる數等なることを認めざらん。然るに、佛國の勢力は、やゝもすれば、この三國に及ばざらんとす。ことにその膨脹力に至りては、到底三者の敵にあらざるなり。その原因や、もとより一

にあらざるべしといへども、余を以てこれを見れば、その人口の繁殖力の常に三者に及ばざるもの、實にこれが一大原因たらずばあらず。

角逐  
後進

乞ふ、これを歴史に見ん。かの英佛二國が、その海外の殖民に従事するや、その年代殆ど相同じ。しかして、その米國印度に角逐せしあとを見れば、實に雙龍の雲間に戦ひ、兩虎の深山に挑むの概ありて、佛國敢て英國に譲るところあらざりしなり。しかるに、その數百年後の結果を見よ。印度は遂に英に歸し、米國は英領と合衆國領とに分たれて、佛國は遂に何の得るところもなきに終りぬ。更に、これを獨逸に見よ。その後進なる、素より佛國の敵にあらざるべきな

凌駕

り。しかも、その僅々三十年間に發達せる獨の殖民地は、既にはやく佛國を凌駕せんとする勢を示すにあらずや。

ビスマルク、嘗て各國殖民地の様を概評していへり。「佛國は殖民地ありて殖民の少きを患へ、獨逸は殖民ありて殖民地の少きを患ふ。地あり、又、民あるは英國なり」と。この語、簡なりといへども、英の膨脹して、獨の元氣あり、佛の勞する所以の理を説明しつくせりといはざるべからず。

架空

今代の形勢において、國運を支配する永年の元素は、山川そのものにあらずして、種族の力にあることを覺らざるべからず。余が人口増殖の程度を以て、國の運命を卜せんとするは、決して架空の臆説にあらず。しかしてこの點より

見て、われら日本民族の前途は、頗る有望なりといはざるべからず。(島田三郎)

二八 臺灣

兇頑

昔時、邦人呼此島曰多加沙古。嘗爲和蘭所占。邦人之相往來居住者亦多。後鄭氏據之。清國滅鄭氏。遂取之。明治七年、島蕃殺沖繩及備中漁民漂流者。我責其罪。遣軍征之。諸酋長多投降。牡丹社兇頑不服。我軍破之。牡丹社遂降。是爲揭我國旗於此島之始。清國遂償以金五十萬兩。乃約束島民。以班軍。島民懷我恩威。臨去惜別。有泣下

稠茂

者。明治二十七年、征清軍興。清國大敗。明年、清遣使請和。弭兵。以臺灣歸我。自是全島爲我版圖。在皇國諸島爲最大。氣候酷熱。不知沍寒。然暑時亦海風送涼。洗熱散暑。無復太難堪者。土地肥沃。植物稠茂。最適茶蔗。山又多產樟腦。基隆。淡水。安平。打狗等爲其良港。(重野安釋)

二九 廣告文

一、滋養香竄葡萄酒

身體強壯ならざれば、精神活潑ならず。精神活潑ならざれば、事業得て爲すべからず。身體の強壯を圖るに種々あ

隨一

りと雖、弊店販賣する所の香竄葡萄酒を飲むが如きは、その隨一なりとす。何となれば、香竄葡萄酒は、數種の良劑を配合し、釀造したるを以て、食物の消化を助け、血液の不足を補ふ大効あればなり。この故に天下有爲の士は、必、身體の強壯を圖らざるべからず。身體の強壯を圖る者は、必、常にこの香竄葡萄酒を飲まざるべからざるなり。且、この酒は、味甘美なるを以て、婦人小兒の如き、平生酒を飲まざる者と雖、亦、飲むことを得べし。一言以てこれを蔽へば、その味、口に適し、その質、身を養ふ。便にして効ありと謂ふべし。之を以て、販賣日に盛に、各地方の洋酒店、藥舗等、到る處、皆この酒あらざるはなし。勢かくの如くなるを以て、本品に擬し、尋

登録

常の葡萄酒に甘味を加へ、以て、自ら滋養第一の良酒と大言して販賣する者あり。伏して乞ふ、身體の強壯を圖らるゝ諸君は、本品貼箋中にある農商務省登録の三個の商標に御注目ありて、眞偽御判別の上、御購求あらんことを。

二、來る七月一日の時事新報

騷擾

北清の騷擾ますゝ、烈しく、太沽の砲撃となり、天津の混戦となり、事態、甚、重大なり。思ふに、今後、列國の運動は、いよ、いよ活潑となるべく、波瀾殆ど底止する所を知らず。この時に當り、變亂の狀勢を審にせんと欲せば、日々の報道を讀むと共に、又、北清の地圖を案ぜざるべからず。こゝに於て、本社は、最も詳細、正確にして、他に比類なき本紙二面大の北

波瀾

豫告

清地圖、並に本紙半面大の清國全圖を製し、七月一日の時事新報附録として、月定め購讀者に進呈する事とせり。讀者もし右に時事新報を把りて、各地より到る各種の電報を讀み、左にこの地圖を開きて、その地理を案せば、事件の實情は、これを掌に指すが如く明白なるべし。依りて、茲にこれを豫告するものなり。

三〇 商人本色

一千七百七十一年、倫敦一巨商、由其妻愛奢侈、致多借財於人。一日有所悟、盡請債主至家。商乃對衆陳曰、諸賢皆貸與財於我者也、我知諸賢持券責我之期不遠矣。

朴實

殷富

然總算借銀其數甚多、勢必不能償完。回思平生、徒事華侈、糜費耗財、深可羞慙。因謹有所請、願諸賢寬我以二年之期、我欲賣大屋美車、遣去婢僕、務行節儉、歸商人本色。如此則迨期、必不負約矣。債主聞之、感其朴實、不飾僉言曰、奚必二年為限、聽從君便可也。屆期、商悉償還負債、其後復致殷富。(中村正直)

三一 維新の原因およびその事蹟の概要

維新の原因は、複雑にて、簡單にこれを説明すること頗る困難なれども、要するに、左記數項の事情、その因となり、その



錯綜

果となり、重積錯綜し、漸次、維新の大業を成し、ものなり。徳川光圀の大日本史を修するや、専ら大義名分を明にしたるによりて、世の學者これに警醒せらるゝもの多く、國學者は、古書を研究して、惟神の道を説き、山崎闇齋、淺見安正等は、書を著して、勤王の志を述べぬ。而してこの學風天下に流行し、大に尊王愛國の志氣を養成し、水戸は、光圀以來の風を繼承して、幕末に至り、齊昭の時、藤田東湖等出て、天下勤王の氣を鼓舞し、頼山陽は書を著して、王室の衰頹、武家の專横を憤慨せり。

寶曆明和の頃、竹内式部、山縣大貳、藤井右門等、皇室の衰微を慨き、公卿の間に入出し、學説を假りて、大に尊王の意義を

鼓舞

淋漓

施設

説き、言頗る過激に涉れり。因つて幕府は、これらの人を捕へて、流斬に處しぬ。後、寛政の三、偉人、林子平、高山彦九郎、蒲生君平、輩出し、慷慨淋漓、大に世の勤王心を喚起せり。かく尊王の氣、内に盛なると同時に、邊要警備の急を告ぐることに頻にて、心ある人々は、幕府施設の緩なるを慨せり。明和、安永の頃、露國はわが國の備なきに乘じ、東方經略の一として、屢、蝦夷の地を抄掠す。幕府、近藤守重に命じて、その地を巡見せしめ、東陲諸藩には、海防を嚴にせしむ。以後、外船の渡來、漸く頻繁となり、文化元年には、露船長崎に到り、同三年には、また蝦夷の地に寇し、五年には、英船長崎を抄掠し、歐洲強國の勢力、漸くわが國に迫り來りぬ。

鎖港

警備の急は、彼我の形勢を詳にする必要を生じ、洋書の研究、漸く盛なり。洋學は鎖港と共に禁ぜられしが、吉宗の時その禁を解き、青木文藏・前野蘭化・杉田玄白等の苦心により、漸くその意を解するに至り、蘭醫始めて開け、次第に政治・經濟・兵學等に及び、泰西の形勢明かなるに隨ひ、幕府の弊政を慨するもの少からず。幕府は家光以來の鎖港主義を墨守し、洋學は、治安を亂すものとし、堅くこれを禁じ、林子平の「海國兵談」を焼き、渡邊華山・高野長英等を殺し、高島秋帆・佐久間象山・吉田松陰等を捕へ、勉めて海外の事情の知られざらんことを望めり。

墨守

嘉永六年、米國の使節ペルリ浦賀に來りて、貿易を開かん

囂然

軋轢

物議

ことを求む。幕府、處置に窮し、「明年確答すべし」とて諭し還らしめ、諸侯に諮詢して、その方策を問ふ。かくて物議囂然として起り、天下の志士、各見る所によりて、開國攘夷の説を立て、相軋轢す。ペルリ、約の如く、翌安政元年、軍艦七艘を率ゐて浦賀に來り、前年の答を求む。幕府やむことを得ず、横濱にて三箇條の約を結べり。越えて安政三年、米國總領事ハリヌ來朝して、將軍に謁し、老中堀田正篤と開港を議す。幕府、物議を憚り、勅裁を請ひ、允許を得ずして、愈その處置に窮す。志士切齒して、その處置を非難せり。

外部の形勢此の如き有様なるに、幕府内部にも、また大騒擾起りて、自滅を早からしめたる事情ありき。そは、將軍繼

開國

嗣の問題にて、家定すでに長じて子なかりしより、慶喜を立てんとするものと、家茂を奉ぜんと欲する人々と、陰然、黨派を分ちて相轢れり。井伊直弼出でて大老となるに及び、英佛二國が支那を破りし餘勢にて、われに開國を迫らんとするを聞き、勅許を待たずして、ハリスと互市假條約十四箇條を定め、五港を開きて貿易を許し、家茂を迎へて將軍とす。これによりて、天下の志士切齒して、その非を鳴らし、遂に安政戊午の大獄となり、櫻田の變となり、人心恟々として、天下騒然たり。

屈辱

薩長その他の外様大名は、關ヶ原以來の屈辱を雪がんと欲するもの多かりしが、將軍家茂攘夷の詔を受けしが、遷延

遷延

先驅

事を擧ぐるを得ざるが故に、文久三年五月、長藩まづ下、關に外船を砲撃して、攘夷の先驅をなし、事體、甚、容易ならず。時に、京都守護松平容保、攘夷の不可を論じ、長藩の禁衛を解き、三條實美以下七卿の入朝を禁ぜり。而して、幕議、開港に傾きしかば、攘夷黨の憤慨甚しく、松本謙三郎は兵を擧げ、平野國臣は但馬に起り、毛利氏も、また兵を擧げて、その冤を訴へんとす。かくて、幕府は征長の師を起し、も、軍用給せず、家茂の薨去に遭うて兵を停め、内外騒擾して、幕府の威令行はれず。一橋慶喜入りて將軍となりしかど、長州の事變全く終結するに至らず。やがて英、米、佛、蘭の諸國は、兵艦を連ねて兵庫に到り、開港を強請してやまず、天下の紛擾、益、甚し。

威令

建議

土佐藩の志士後藤象次郎等、内外の形勢に鑑み、幕府に建議して、宜しく政權を朝廷に奉還し、政令歸一を謀るべきを論ず。慶喜この議を採用し、慶應三年十月十四日、遂に大政を奉還し、武家政權を私せしよりおよそ七百餘年にて、大權再び皇室に歸しぬ。

かく政權朝廷に歸せしかば、大に諸侯を會して國是を定め、三條實美以下の官職を復し、毛利氏の罪を許し、攝關將軍以下の官職を廢し、新に總裁・議定・參與等の官を設け、有栖川宮熾仁親王を總裁とし、三條實美・岩倉具視を議定とし、大原重徳・西郷隆盛・木戸孝允・大久保利通等多く薩長の士を採用して參與とし、佐幕の公卿以下二十餘人を貶せしかば、慶喜

佐幕

參謀

以下舊幕の士、皆この改革は、唯、薩長二藩の私福を弄するものとし、これを憤ること甚し。適、江戸薩摩邸と幕士との間に争鬭あり。慶喜意を決し、京師に迫り、薩藩を討たんとし、遂に伏見・鳥羽の戦となり、幕軍敗れて、慶喜、江戸に走る。朝廷、嘉彰親王を征夷大將軍とし、西郷隆盛を參謀とし、これを討たしむ。慶喜勢の抗すべからざるを察し、勝安芳を遣し、隆盛に就きて罪を謝せしむ。時に、會津・仙臺・米澤等の諸藩、官軍に抗せしものも、相續ぎて降り、大鳥圭介等は下總に敗れ、榎本武揚等は五稜郭に降り、全國また一人の朝命に抗するものなきに至り、而して遂に明治の昭代を現出せり。

(中野禮四郎著、帝國歴史)

三二 處世の歌

朱絨  
紫綬

渾沌

吾等が力弛む時、  
 吾等が汗の乾く時、  
 朱絨の宰相威嚴なく、  
 紫綬の將軍名譽なく、  
 希望の光地に落ちて、  
 果は國家もなかるべし。  
 吾等が鍬を捨つる時、  
 吾等が梭を投ぐる時、  
 紳士も饑を嘆くべく、  
 淑女も寒に堪へぬべく、  
 紅顔玉姿の愛は失せ、  
 死せる社會となりぬべし。  
 吾等が鶴嘴執らぬ時、  
 吾等が斧の錆びる時、  
 汽罐の釜に湯氣もなく、  
 彫欄畫棟の影もなく、  
 海陸忽ち便り絶え、  
 世は渾沌となりぬべし。

八珍  
綾羅

吾等が劍執らぬ時、  
 吾等が艦に乗らぬ時、  
 兵舎の門に雀羅張り、  
 四海の濱に錨錆び、  
 内患外憂暇もなく、  
 國家の秩序なかるべし。  
 吾等は無位の王者なり。  
 吾等は無上の權者なり。  
 黄金の冠あらずとも、  
 輿奪の權はあらずとも、  
 四千餘萬の生命は、  
 懸りて吾等の肩にあり。  
 吾等は神の寵者なり。  
 吾等は國の勇者なり。  
 食には八珍あらずとも、  
 着るには綾羅あらずとも、  
 健全の幸身に受けて、  
 弱者を救ふ力あり。  
 吾等は自主の司なり。  
 吾等は自主の主なり。  
 兵仗左右を衛らずも、  
 人爵姓を飾らずも、

耕して食ひ堀りて吞む、

獨立獨歩の覺悟あり。」

吾等は國の寶なり。

吾等は富の基なり。

牛羊放つ野はなくも、

堤を築く粟なくも、

働く腕に汗たりて、

懶者を鞭うつ氣概あり。」

曉近き大空に、

希望の星の招く時、

吾等の通ふ樂園は、

冷たき禮の煩もなく、

一致の愛に助けあひ、

謠ふ唱歌に力あり。」

慰安迎ふ妻の笑み、

慰安の神に袖ひかれ、

食卓圍み睦みあひ、

果は臥戸に入りし時、

罪なき身には苦悶なく、

夢も圓かに結ぶなり。」

心に刻む自主の箴、

艱苦に琢く胸の魂、

慰安

浮雲の富も望なく、

沙上の榮華見るも憂し、

吾等は正しき道ふみて

最後の勝利期するなり。」

(中里白香)

三三 讀書 (その二)

交遊に誤らるゝことあるが如くに、人は讀書にも誤らる。書を擇ぶの要は、友を擇ぶの要にひとし。良友の得がたきは、今も昔も同じけれども、書は、今は如何やうなるをも容易く手に入るゝを得るが故に、利害相半す。書を得て、良き師友にも劣らざる多くの利益を受くるものあれば、或はよからぬ書に親しみ、日を重ねて、智歪み、情穢るれども心附かざるものあり。

咀嚼

讀書は精神の滋養物なり。何事よりも先づよく咀嚼して消化せしむるを第一とすべし。新しきに渴き、珍しきに飢ゑて、ひたすら急ぎ、貪り讀むは、一時に多くの滋養物を食ひて、丈夫にならんことを望むが如し。害ありて益なし。或は彼の味増漉しといふものに、いろくの液體を濯ぎ入るゝに譬ふべし。その當座こそは一種の濁り水を湛ふれども、暫くして殘し留むる所なし。舌あたりよく、吞込み易く、生温く、甘たるき、液體に似たるものゝみを讀むこと勿れ。刺戟性に富みたる香料に似たる書に慣るゝ勿れ。肉こはく骨硬きものを讀みこなすことを習へ。正坐せざれば解し難きを常の友とし、寢轉びて讀み得らるゝやうなるに親

濯ぐ

刺戟性

雜著

複寫

刮目  
心讀

しむ勿れ。殊に戒むべきは定評なき雜著を讀むことなり。時間を徒費するの損あつて、心を養ふの得なければなり。就中、新聞紙、雜誌類の與ふる智識は、その半以上は線香、花火の如く、石鹼の泡の如く、然らざれば幾度も複寫せる寫眞畫の如く、若くば旅商人の賣附くる小間物の如し。或は暫時にして消えて跡なく、或は微かにして分ちがたく、或は全くの賈物なり。時勢を知らんために、その最良なる一二を擇びて讀まば足れり。多く新聞、雜誌を讀むの暇あらば、一卷たりとも多く古今の名著を精讀せよ。

「一卷の人に刮目せよ」といふ西洋の諺あり。萬卷の書を目讀せる者よりも、一卷の良書を心讀せる者の、遙に爲すあ

目録  
心讀

るべきことをいへるなり。ブルタークの「英雄傳」は、嘗て幾多の英雄を作りぬ。善く讀む者にとりては、「西國立志篇」只一卷も立志の礎となすに足るべし。

小説・新體詩もまた今の少年の誘惑なり。新體詩の模し易しきは山の麓の蓐なり。摘取り易きに釣られて次第に深入りし、竟には道を失ひて歸ることを忘れん。小説は、その少數を除き、多數はその餘りに感情的なると、生温く、甘たると、随つて走讀して用を足らしむる悪習を醸すと、その凡人本位なるとを有害なる理由とす。昔の小説は、その作意は淺かりしかども、その記する所は凡人以上の人物に關すること多かりき。今のは然らず、殆ど皆凡人の話なり。或

走讀

挑發

荒唐

趣味性

は薄志者の墮落を寫せるもあり、或は極端なる不運の人の上を、感情を挑發するを主として、細やかに寫したるもあり。昔の小説にも之に似たる作無きにあらねど、普通行はれしは英雄本位なり。多くは荒唐奇怪にして實らしからざれども、中には「我及ばず」と作中の義人・烈士・忠臣・孝子に感じて、慚愧の心ほのめくこともありしものなるが、今のを讀めば「この主人公に比ぶれば、我はまだしも勝れり、又は、かゝる過失は我のみにあらずなど、自ら許し、自ら辯護し、奮勵・力行の氣を遲鈍ならしめんとする傾なき能はず。精密に論ずれば、經驗もあり、見識も秀でたる者にとりては、今の小説の方却りて、人生を知るの助ともなり、趣味性を養ふ道具ともな



世故  
人情

ることあれど、之を少年に望まんは難し。社會の實際を知らざる者は、第一、小説中に寫せる世故・人情が、如何ばかりは全くの筆のあやなりや、いかばかりは眞に近きものなりやなどいふことを、判斷する力もなきなり。よしや其事は世の眞相に近く、人情もよく寫されたりとするも、常にかゝる感情的の作を友とすれば、とかく些細なる事に感じ易くなり、時としては、常に凡人の上のみ想像する爲に、情卑しくなり、志爲に純り、彼の、大なるを仰ぎ高きを慕ふ向上の念は、漸く衰へ、清く麗しき理想の影は、竟に遠く消え去りて、又、追求すべからざるに至る悔あらん。小説を耽讀するは、到底彼の英雄・大家・高士・俊才の傳記、又は面白く綴りたる科學書な

どを讀むの裨益多きに如かざるなり。

三四 讀書 (その二)

こゝには讀書の效用と利益とを語るべし。

常に良き著述に親しむ者は、只獨り居るも寂しきことを覺えず、師を求めざれども日に月に學ぶ所あり、失意にも心慰み、不平・憂悶もこれを忘る。「書は少年の滋味にして老年の娛樂なり。順境には心の飾りともなり、逆境には庇護と慰諭とを與ふ。家に在れば心を樂ましめ、外にいてたる時も邪魔とはならず。夜の伴、旅の伴、僻地の伴」と、羅馬の名士シセロの言ひたるも同じ心なり。されど、かくの如きは人

憂悶  
庇護

の讀書より受くる最大の利益にはあらず。

諺に「百聞、一見に如かず」といへるは、何事も其身親しく經驗するに如かず、といふ意味なれども、人の壽命に限りあれば、七十、八十まで生きたりとも、目に視、耳に聽くことは幾何もあるべからざるなり。わが日本國內の山水、風俗、だけにても、一生には觀察し盡さるまじきを思ひ、天地の大なるを思ひ、時の窮りなきを思へば、人間一身の經驗の、狭く、淺く、小さく、且、少かるべきは言ふにも及ばぬことなり。さればこそ、今も昔も、苟も事物の眞理を知らんと欲し、事物の眞の相を看んと欲する人々は、一方には、見聞を勵み、經驗を努むると共に、他方には、廣く内外古今の名著を得て、之に親しまん

碩學

ことを願ふなれ。所謂名著は、人間世界開けてこのかた、凡三千年間に出でたる大賢・高德・碩學・大才の、經驗・觀察・思索・想像をそのまゝに、又はランビキにかけて傳へたるものなり。或は顯微鏡・望遠鏡に譬ふるも可なり。もとは人工に成りたるものなれども、今は、人をして、肉眼の看得ざる微かなるものをも、遠く、且、大なるものをも看取せしむ。後れて生れたる者にして、良書の助を借ることなく、只その貧弱なる腦力のみを恃まば、自然界の事も人間界の事も、僅に一斑を窺ふに過ぎざるべく、その一斑さへも、正しく明かには看得ざるべきが常なり。要するに書は知識の寶庫にして、兼ねて智を研く砥石なり。

貧弱

砥石

啓發

吐露  
翰襲

しかしながら、讀書の用は、尙、これに盡きたるにあらず。伊太利の詩人ペトラルクはいはく、「予に良友あり。彼等、皆名士・大家にして、何れも偉業を成したる者なり。予、もし、その助を藉らんとすれば、彼等喜んで我が請を容る」と。これ、良書が常にその讀者を啓發し、誨導し、鼓舞し、奨勵する力あるをいへるなり。北米の名士チャンニングはいはく、「吾人が傑出せる心と相語ることを得るは、おもに書籍の媒介に因る。而してかゝる價知らぬ交際の手段は、衆人の自在に用ひ得る所なり。最良の書に在りては、俊傑、吾人に對ひて語り、その、最、貴き思想を吾人に與へ、且、その心靈を吾人の爲に吐露す」と。英國の詩人ミルトンもまた曰く、「良書は保存翰

襲して後世に傳へられたる俊傑が貴重なる生血なり」と。人は良書に親しみて、先づ我が卑小なるを知るなり。次には、或は識見の大なるに驚き、或は品性の高きに感じ、嗚呼同じく人といふ。高く、清く、美しく、偉なること、かくの如きものもあるかと歎ずるなり。若かりそめにも、その偉なるもの、美しきもの、清きもの、高きものに私淑し、之に倣はんとするの志を生じ、日に月に力め行ふに至りなば、書を用極まれるに近しといふべし。（坪内雄藏著、中學修身訓）

明治實業讀本 卷の四終

明治四十二年二月十九日印刷  
明治四十二年二月廿二日發行  
明治四十二年十月廿五日再版發行

明治實業讀本全八冊

定價金貳拾五錢



著者

發行者

印刷者

印刷所

中村康之助

泉屋清次郎

森山章之丞

綾部喜久二

宮本印刷所



發兌

大賣捌

東京市神田區表神保町二番地  
電話本局四三七一  
振替貯金口座東京一一三五九

同文館

東京神田 東京堂 東京牛込 同文館支店  
大阪東區 寶文館 韓國京城 日韓書房

広島大学図書

2000054290



沿<sup>カ</sup>五<sup>カ</sup>無<sup>カ</sup>特<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>批<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>知<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>  
懶<sup>カ</sup>愧<sup>カ</sup>せん<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>知<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>世<sup>カ</sup>故<sup>カ</sup>せ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>こ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>ず<sup>カ</sup>  
純<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>こ<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>傳<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>た<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>サ<sup>カ</sup>  
知<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>